



特定非営利活動法人

とじふにニュース

35

とじふに理事長 中山 君江

東日本大震災で被災された方々の御冥福と御見舞いを心から申し上げます。

あの日から五ヶ月近くになります。これからが大変な時期です。

早くいつもの暮らしに戻れるように願います。

大津波でまだ行方がわからない方が大勢おられます。

どこかで生きておられますように願わずにはおられません。

障害者情報フリップでも少しでもお役にたてますようにと願いをこめて、義援金活動をさせていただきます。

自分たちの今何ができるのか、出来る思いを被災地に届けました。

特に障害者の方、高齢者の方、ひとりおられておられるのかいつも心配です。

この震災で十六年前の阪神大震災を思い出しました。

重度の障害者、視力障害者、聴覚障害者が情報が入らず、壊れ

かけた自宅で心細く何日か暮らしていたと後から聞きました。

あの時は、自治会がしつかりされている地域とそうでない地域がはっきり分かれました。

今個人情報保護とかでどこに障害者の方がおられるのか、わからない状態です。

いろんな考えがあり、プライバシーも大切かと思いますが、行政だけでは大きな災害があると、とても対応できないと震災を経験した者は思います。

信頼して地域の長、障害者団体の長には名簿を託してもいいのではないかと思っております。

隣近所の人たちがどれだけ多くの人を助けたか、震災の時、経験しました。

行きたくても避難所に行けない障害者もいます。

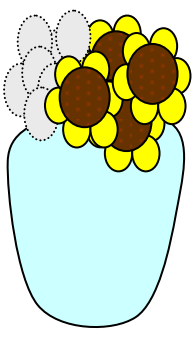
トイレに行けない、相手が何を言っているのかわからない。

出来ましたらバリアフリーの建物を障害者の避難所にしていただければ助かります。

いつもの暮らしを忘れがちですが、これが大きな幸せなんです。

無事このとじふを感謝せねばい

反省しております。



作 きよろりん

あの日を忘れない

西宮市身体障害者連合会 理事長 片倉早苗

一九九五年一月十七日午前五時四十六分

私はベットの中心にいました。

その日は友達の就職の事で京都に行く約束をしていましたので「おはようございませう起きようかな」と思っているところから突然 突き上げられるような衝撃とともに「ゴーン」といつ大きな音がしました。

私は地球が爆発したのでは？と思う、頭から布団を被りましたと同時に激しいゆれ。

家具の倒れる音、食器の倒れる音、私のすぐ横にあったタンスが私の上に倒れてきました。

私の人生もこれで終わりがな？」と思いました。

後で聞けば僅か一分足らずのゆれでしたが、私にはとても長く感じました。

おしおしやへ揺れが収まり、またタンスを起してもいらし私はベッドから這い出せませんでした。

隣の部屋へ逃げたが母は母室で寝ていたので見えない、おしおしおし「なな」と情けなく叫ぶ。

何言っているの、お母をななとかなんか思えへんや、おしおしからして

なさい。は洋服着て」と言いながら私も服を着て、あ、そーや、シルキーはどっしりしてる？」と思いシルキーが寝ているリビングに這うようにして行きました。

シルキーが寝ていた所は本棚の横だったので本がいはい落ちていてシルキーは震えていました。

「可愛そうなことをしたなあ、ごめんね」と言いながらシルキーにインコートを着せました。

そんな事していると、お隣の奥さんが玄関の戸をどンドン叩いて「天丈夫ですか？早く出てきなさい」と言われるのですが、ありとあらゆる物がひっくり返っているので狭い家なのに、なかなか玄関に行けないのです。

やこの思いで外に出ると近所の人も出てきて「無事でしたか？」ゆい揺れでしたね「怖かったですね」と色々な声が聞こえてきました。みんな何が起きたかわからない。

夫が小さなラジオを持っていたのでスイッチを入れると、津名郡北淡町が震源地で震度六強の大地震」と繰返していました。

近所の人で怪我をされている人も何人かいるので、車で病院へ行くことになり私達は避難所へ行くと決まりました。

私達家族は避難所へ行かない」と言いませんでした。

「お余震があるかもわからない、危ないから避難所に行きませよ。」と言いつつ行きましたが私は行きませぬ」と断りました。

だして学校、体育館のような広い所に行けば、一人でトイレに行かせませぬ。

「トイレットに連れて行くつもりで」と親切に言いつけましたが、一回や二回好むと、何回もお願ひするのは、こちらも心苦しい。連れて行くのは、おもしろいと思つたかも知れません。

親子でも気を遣ひます。そして盲導犬も行くので私達は形だけはちゃんと残してゐる家に入りました。

みんな靴を履いたまま家に入り、犬は玄関脇の小さな部屋に入りました。

幸いこの部屋には何も置いてなかつたので……ぐりあえず、座る所を確保しようといつて、軍手をはめて割れた食器を片付けました。

大切にしていたフイリングラスや、一度も使っていない志野茶碗など大切にしていたものがみんな割れてしまいました。「ゴミ袋何杯なつたでしょか？」 破片は箒で掃きだして座る所を作りました。

後は何をしてもいいかわかりません。

小さなラジオからは悲惨なニュースばかり聞こえてきます。地獄といつていい状態だと思ひました。

到着したところで私達が無事だということを知り、兄弟や友達に知らせたのですが、ライノラインはすべてダメ。あの頃はまた携帯電話なんて一部の人が持つていませんでした。

私は子供と一緒に公衆電話のある駅まで行きました。

外へ出ると地割れして大きな段差が出来てゐる。信号機も倒れてゐる。高梁橋は落ちた。酒屋の前は割れたパンが散乱してついでに倒れてゐる。

やっと電話ボックスを見つけたが、長蛇の列。漸く私達の順番が来たので、大阪の妹に「家族はみんな怪我もせず、元気だから。後はそちらから親戚に連絡するつもり」と頼んで電話を切りましたが、私の後にも長い列が出来てゐました。

お昼になつても食欲もないし冷蔵庫もひっくり返して食べるものもありませんでした。

夕方になり子供が「スーパーは開いてるかも」と言ひ出て行きました。

スーパーには牛乳と菓子パンが少しあったので、それを買つて帰ってきました。水もないので給水車のところへ汲みに行かなければならないのですが、大きな入れ物がありません。

すると子供がダンボール箱を組み立てて、その中にビニール袋を敷いて、そこへ水を入れてこぼれないように袋の口を縛つて二人で持つて帰ってきました。

ああ、なるほど。若いこの発想はいいなあと思ひました。

夜は家族四人、一部屋で休むことになりました。盲導犬はいつも決まったところで寝かせるのですが、もし大きい余震がきたらといつて、私達と同じ部屋でラジオを聴きながら休みました。

地震から二日後、ようやく盲導犬協会と連絡が取れました。

ソルキーを迎えに行つてあげたいけれど、西宮には車が入れないので、京都まで連れて来られるなら預けますといふので、私達も大阪の妹の家へ避難するのので、京都まで行つてソルキーを預けました。

お水がくるようになってきたら、さっさと迎えに来るからおりようとして待っている。」と言って別れました。

妹の家に避難しましたが、全壊の家を早く解体しなければいけないと言われ、被災証明を貰いに行ったりしているある日、盲導犬ユーザーで被災した人から話を聞きたいという依頼があり、昼間なら壊れた家にいるからと返事をしました。

中目新聞記者がみえて、地震のときの様子や、なぜ避難所に行かなかったことを聞かれ、最後に盲導犬の写真を貸してほしいと言われませんが、そういう簡単には出てきません。

夕方、もう一度来ると言われ一枚見つける事が出来ました。

次の日、中目新聞にその記事が出ました(どんな風に書かれてあったのか、私は知りません)その記事を読んで、東京のテレビ局のディレクターから電話があり、手引きも交通費も出すから盲導犬に会いに行こうほしい。その様子を放映したいと言われたので私は行くことが出来ない」と即座に断りました。

訓練所にも避難している人がたくさんいます。そして我が家のシルキーは人一倍(いや、犬一倍)甘えたなので、私を見たら喜んで飛びついて顔を舐めたり、手を舐めたり大騒ぎします。

そんな事をされたら、ごいごいして私だっけと涙を拭きすていよう。そんな場面を放映すれば、観ている人も感動します。でもせシルキーを連れて帰る事は出来ませぬ。

ライフラインは復旧してなくて、住むせいのうもないので連れて帰れませぬ。

だから行けません」と言ったら、ディレクターは犬はその時喜んでおすべに忘れますよ」と言いました。私はああ、この人はユーザーの気持ちもわからないし、盲導犬とユーザーの絆もわからないんだ。こんな人にいへら話しても理解してもらえない」と思い、電話を切りました。

次の日もまた、電話がありました。強く断りました。その後女性自身」からも取材があり、報道のありかたを考えさせられる出来事でした。

三月の末に待ちに待った、ライフラインが復旧して、私達の住むところも見つかりました。

仮設住宅の申し込みをしても当たる気配はない、賃貸のマンションと話しているところに、室内インテリアの仕事をしている人(その人とは以前からうちの患者さんだったが、実は私達夫婦は県営住宅に住んでいるが、家内はアルツハイマーで、施設に入っている。私は仕事でほとんど家に帰らない。だから住宅は空家なので使ってもいい。家賃と公共料金は、私の口座に振込んでくれれば、こちらから住宅課に払う」と言われ、このおいしい話に私達は甘えて県営住宅に住みました。

ところが一年位過ぎた頃、住宅課の人から電話がありました。

「Xさん、お宅一年以上家賃滞納だから至急支払って下さい」と言われびっぴり仰天……

実は私はXさんではありません。「から始まり県営住宅に住むようになった経緯を話しました。すると課の人はそういう経緯は

よくわかりました。誰が住んでいいものから、滞納している家賃をちゃんと払ってほしいのです。」と初めて本当の家賃がいくらなのかわかりました。

私達はXXさんの提示した、倍のお金を払っていたのです。またくあほな話です。

XXさんに連絡しても不在だし、仕事関係の人に聞いても、最近見掛けないから全然わからない」ということでした。同じ住宅に住む人達からも、いやみを言われたり、いじめられたりしました。住宅課の人は「家賃さえちゃんと納めたらずっと住んでもいい」と言われました。なんだか居心地も悪いし、都市整備公社の職員さんに恥を忍んで話をする、駅から近くで夫も飽える家を見つけてくださいました。

日当たりもよくて四人が住むにはちょうどいい間取りでしたが、やっぱり自分の家がほしい」と思い、新聞のチラシで「いいか」と思う物件があると見に行きましたが、帯に短したすきに長し、「で、なかなか思うようにならなはありません。

そんな時、息子の友達で工務店を経営している人が、土地付で古い家が売りに出ているから、「これを買って古い家を壊し、そこに家を建てたら「エアドバース」になれる。

早速場所を見に行くと、阪急阪神線から歩いて七、八分という大変便利なところなので、思い切って買うことに決めました。

ローンを組んだり、色々な手続を全部工務店の人がして下さいま

した。

私達は壁紙を選んだり、キッチンのシンクや洗面台など、展示場に見に行ったり、息子に点図家の間取りを書いてもらったり、楽しいひとときでした。

そして二〇〇〇年三月にラムのお正月を新しい家で迎えることが出来ました。

「ここが私達の終の棲家やねん」と、夫と笑ったのも束の間、4月、息子の運転する車で淡路島へ「花博」を見に行き、その一週間後は一人静かに旅立っていきました。

大震災の後、肺炎で緊急入院をしてお医者さんから「くれぐれも気を付けるように」言われていたのに、心労もあつたし夫の身体は本人も気付かないうちに蝕まれていたのかもしれない。

あの日から十八年、ようやく笑って話せる時がやってきました。

もう生きていくのがいや、あの時死んでしまえばよかったのに」と何度思ったか知れませんが、でも全国各地の人が物心両面で私達を支えて下さいました。

そして、町を歩いていたら同じ被災者が「無事でよかったですね！ わんちゃん怪我しなかった？ お互い元気でいようね」と声をかけて下さいました。本当に多くの人に支えられて生きていくことを感謝しています。

最後にあの頃作った川柳をいくつか書いてみます。愚作ですが…。

豊かさに はじめをかけた 大地震

安否問う 十年ぶりの 友の声
心まで 冷える ニュースに フジオ消す
ほとほと 水に感謝の 手を合わせ

東北関東大震災で被害に遭われた
皆様へお見舞いを申し上げます！

宝塚市身体障害者福祉団体連合会

会長 藤原 隆文

平成七年の新年を迎えたばかりの早朝、私達家族五人は、阪神大震災に襲われた。まるで空中に打ち上げられたかのような、下からの突き上げで目が覚め、慌てて起き上がるという状況がぐるぐる回ってくる。

家族に声を掛けたが、タンスや家具の下敷きになっていて返事がない。

テレビは部屋の反対側に移動している。台所に目をやると水屋も冷蔵庫も倒れ、茶碗や皿が割れて散乱している。

何が起ったのか、ひょっとしてまだ夢を見ていたのか。

「アッ、アッ、アッ」

タンスの下から家内のか細い声が聞こえる。

当時、中学三年生だった長女がやむを得ずを覚まし、むっぺんやんタンスを持ち上げ起きてきた。

家族にのしかかるタンスも持ち上げ、全員を救出。幸いに皆々用の

布団を頭からかぶっていたおかげで怪我は無し。力持ちの娘が私たち家族の命の恩人だ。余震の中、急いで福祉センターへ避難した。早朝だったため、まだ扉は閉まっていた。

街がどうなっているのか見回すと道路は裂けている。崩壊した民家があった。ビルが倒れていた。電信柱が折れていた。大地震に襲われていることがじわじわとわかり、恐怖が押し寄せてきた。

一週間ほど福祉センターで避難生活を過ごした。福祉センターはバリアフリーで車いすでの生活に支障はなかった。しかし障害者で避難していたのは私だけで、近所の住民が大勢避難していたので、それに気を遣って、ほとんどの障害者が余震の続く自宅で過ごしたことを後から知った。障害者が気兼ねなく避難出来て、支援が受けられる専用避難所が必要なることを痛感した。この度の東日本大震災で津波に襲われた障害のある人たちはどんな状況下におかれているのか、きつと私が体験したことにも及ばないほどの困難に見舞われているに違いない。

健常者も障害のある人も共に生きる社会は理想的な社会だと思ふ。しかし、避難所は障害者だけが安心して避難できる場所でないならならぬ。

肢体が不自由な人にとっては、車いすトイレや着替えに必要なベッドが必要だ。

大きな声を出したり、動き回したりする障害者の家族にとっては、周囲の理解が必要だ。

視力障害者にとっては、周りにどんな人がいるのか、どんな状況下

にあるかを伝えなければ、とても安心してつらくなじだろ。盲導犬を連れて避難できることも要件の一つだ。

聴力障害者にとっては、手話や要約筆記者を配置して十分な情報提供をすることが必要だ。

内部障害者にとっては、人工透析や心房除細動装置など医療的機器がなくてはならない。それらの装置を使うために長期の停電にも対応出来る容量の大きな発電機も必要だ。最も必要なものは、何よりも周囲を取り巻く人たちの障害者に対する理解だ。

この度の東日本大震災では、家族同様のペットを避難所に連れて行けず、心を鬼にして手放した人が多くいた。飼い主をなくした動物は哀れである。牧場の多くの牛も被害にあった。

ペット同伴のホテルもあるが、ペット可の避難所もあつてよいのかもしれない。ペットと障害者を一緒にするとお叱りを受けるかもしれないことを承知で言わせてもらえば、理解してもらえない人が多い避難所へ一緒に行きたくても行けない家族が多かつたことは同じ問題のような気がする。

阪神大震災以後、宝塚市には市民会館もないままだ。

宝塚市に一千人くらい収容可能な市民会館と障害者専用の避難所も兼ねた障害者総合福祉センターが一日も早く出来ぬことを夢に見ている。

東南海大地震が来るかもしれないといつわられてる今日、多くの犠牲者が出てからには遅いのだ。

視覚障害者と災害

宝塚視覚障害者協会代表者

田中 峻治

視覚障害者にとって一番困るのは、自分の生活を送るには、身の回りの物を移動する頭の中のコンピュータがぐるぐるしてしまつてどこに何が有るか、さっぱりわからなくなり不安におちいります。

だから視覚の良い人から見たら「きたない、片付けたらわ」と云われるがこれが、自分のスタイルだ。ほつてくれと言いたくない。

よしんば災害がおきておどろくするといつても視覚障害者が動け事ができません。

十六年前阪神淡路大震災では、津波が起きなかつたから視覚障害者も助かつた人が、多かつたかもしれません。

この三月十一日に起きた東日本大震災の様に津波で家ごと持つていかれては、ひとたまりもありません。

まだ実数は分かつていませんが、亡くなられた方が多く出てくるように思われます。

避難所にいけばいいのですが、誰が視覚障害者を引っ張つてくれるでしょう。行政→消防員→自衛隊→連れて行つてもらつても、居場所がない。寝る場所の広さだけしか与えられなかつていて、便所は入り口は入り、食事の分配はカレー等、色んな面で

とまじい、視覚障害者に対してそんなケアが、していただけるのか疑問です。

トイレの入り口に行くにもひとりでは、行動できません。周りの人に気配りして踏みつけないか、けつまつかないか、の神経をすりへらしてしまってます。

そう言った障害者だけの避難所ならうまくいくかもしれませんが、それに視覚障害の白杖は、むやみに使用できない。ただ情報源としてラジオが一番いいです。避難所にはテレビも置いてありますが、あれは視覚障害者にとっては、無意味無用に思われます。

ただ一ツだけの利点では、社会の視覚障害者をわかしてもらえ、絶好のチャンスかもしれないませんが、その場に飛び込んでいく視覚障害者がいるか、これは大変勇気もいる事だと思えます。

したがって視覚障害者は、隣近所さんと頻繁に付き合いたい、災害が起きたときに手助けしてもらえ、住民を作っておくことが、大切なように思えます。

【たねのり人々】

スカイ宝塚 代表 高瀬 健二

東日本大震災から二ヶ月以上が経ちましたが、被災地はまだまだ混沌の渦の中です。

家族を亡くした、家を仕事を失った、多くの被災者の方々のことを思うと、阪神淡路大震災で被災した自分と重なってきて、その大変な

心労に胸がふさがざる思いがします。

話しは変わりますが私は、一九六五年、中卒「釜の卵」として神戸を縁の下から支えた一人です。働き続け三四才の時精神障害の認定を受け、二十年間生活保護で暮らしました。

その間、働ける範囲で大阪・西成区の釜ヶ崎で医療福祉相談と炊き出し、夏祭り、越冬斗争の一員として十年間、また神戸で精神障害の当事者団体（この頃の場ひろい）でボランティアとして関わってきました。そこで社会の差別構造を身をもって知らされました。

現在、精神医療福祉は、大きく改善されたように見えますし、使える制度も増えたように見えますが、悪質病院は減らず医療観察法、自立支援法と精神障害者をとりまく壁は高く厚く複雑になる一方です。

8

退院促進や地域移行に至っては、その受け皿も無い名前ばかりのものです。そうした精神障害者への差別・偏見が複雑に絡んだ社会では、釜ヶ崎の寄せ場問題とも深く関わっています。日本の産業構造を底辺で支えている寄せ場労働者は、北海道・東北・九州といった地場産業の少ない地域の人々が多い。そのことと今の被害地の混沌とが表裏一体に見えてくるのです。表を支えてきた「裏」の人々の崩壊があらわれているのではないのでしょうか。

復旧、復興したとしても、それは外見だけで内面は何も変わっていない。阪神淡路大震災でも、同じでした。

私達は被害地を見る時、「貧困とは何か」を改めて問い直す必要があるのではないのでしょうか。

〜東日本大震災に想う〜

ボランティア 中村 文子

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災は観測史上最大で、地震による巨大津波は多くの大切な命をのみこみました。

私達が経験した阪神淡路大震災とは比べようのない被害をもたらしました。震災から四カ月たった今でも多くの方が避難所で不自由な生活をされています。それに加えて原発への不安、被災者のお気持ちをおもつと胸が痛みます。

阪神淡路大震災当時、私は気力体力も充実していました。安否の確認を兼ねた、おにぎりや水の配布、支援物資の仕分け、支給、要介護者への支援等、三十九度の熱を出しながらもがんばりました。

あれから一六年、気力はあつても体力が伴わない今、あの当時と同じようにできなくても何とか被災された方の役に立ちたい。そんな思いで今までに、仲間達とチャリティコンサート 募金活動等を行いました。

息子が以前勤務していた盛岡や、恩師が住んでいた仙台はどうなっているのか知りたい、行きたい。思いは多々あるけれど、これからも自分が出来ることで、被災された人々への支援をしていこうと思つています。

聴覚障害者に対する緊急時の情報保障について』

宝塚中途難聴者の会 大上 清

NPO法人介護支援センター とことこ理事長中山さんの要請に応え中途失聴者 難聴者の立場から投稿させて頂きます。

先日ある集会で講演を頂きました。今や人間社会にとって情報は空気や水に等しい位大切であると聞きました。人はその大切な情報を目や耳を使って様々な手段方法で得ています。処が耳の不自由な私達は聞こえる人の通訳とか何らかの支援、手段を駆使し少しでも多く、そして正しい情報を迅速に得られる環境づくりを目指し努力しています。その一つ、話内容を文字にして通訳する要約筆記者の派遣が法制化されました。兵庫県では三〇〇人以上集まる県主催のイベントは必ず手話通訳者、要約筆記者を配置する様になりました。又、補聴器で聞き取り易くする支援機器 磁気ループ（話内容が明瞭に伝わる機器）も公的施設の会議室にも敷設される様になりました。しかし緊急時における情報支援は今一で難しい課題です。

大震災等になりますと支援者、当事者に関わらず自分の身を守るのが精一杯で人の助けは期待できません。そのため災害弱者といわれる障害者、高齢者は平素からの心がけが一番大切です

以下私達が十六年前の阪神淡路大震災の教訓を生かし防災マニュアルをつくり啓発活動をしています。

一・避難袋を持つ。大切なものを揃え入れ何時でも持ち出せる

(住所録、保険証、預金通帳、筆記具、お金、補聴器予備と電池等)

一 自分の避難所を普段から確認し家族等と打ち合わせしておく。

二 避難所におけるコミュニケーションを容易にするため広域的なネットを確保する。

四 役所、消防、近隣に障害を隠さず理解協力が得られる様な環境づくりを平素から心がける。 以上 です。

震災をふまえて私たちができることは…

アイエルセンター長 石川 博之

あの悲惨な大震災から5か月がたちました。まだまだ悲惨な状況が続いておられる中、懸命に日常を取り戻そうとされている姿を多く目に出来るようになってきました。しかしその中で、報道されていなかった話も知ることが出来ました。

ある災害救助に参加された方の話です。その方は災害救助犬と共に倒壊した家屋の中から被災者を探す活動をされていきました。

その災害救助犬は生存された方を見つけると嬉しそうに尻尾を振り、残念ながら「く」なられた方を見つけた時には尻尾を丸め悲しそうに「振返」(vibrant)します。

救助隊と被災地に駆け付け、一面倒壊した街中から被災者を探す活動を開始されたそうです。少し進むごとに尻尾を丸め悲しそうに振り向くのだそうです。救助隊が活動を開始すると被災者を見つ

けることが出来ましたが、残念ながら「く」なられていました。救助するためには倒壊された家屋をどこか作業が必要になるためどうしても時間がかかります。その間に何とか生存されている方を探すため進み始めましたが、その都度尻尾を丸め悲しそうに振り返ります。法律により「遺体に触れることが出来ないため赤い旗をそこに置いてまた探索に向かいます。一歩、一歩、一歩、…」

振り返ると一面赤い旗が壊滅した町に棚名手痛そうです。

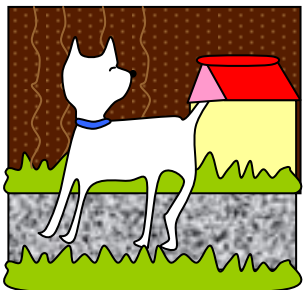
思えば、阪神淡路大震災でも悲惨な状況がありました。報道されたことは一部分だけでした。

今私たちが出来ることはなんでしょう。少しでも被災地でもの復旧に手助けする事と「回の震災で得た経験や正確な知識を受け止めその経験を活かしていくことではないでしょうか。

各地で募金の輪が広がっていますが、情報クラブでも被災地の障害者のために募金活動を行っております。被災にみまわれた障害者が被災以前の状況にいち早く戻れるようにがんばって行きましょう。

そして、「この経験を自身のために生かしてきましょう。

それが残された我々の責務であるでしょう。



四月のパリ旅行記

十川 一郎

今回、渡航の目的は第一に、ドイツ人とフランス人と日本人の友達に会うことでした。

一週間しかなかったのでパリに着いて、すぐにフランス人一人に電話して連絡が付き時差ボケの中、乾杯も出来て友達の家で一泊。次は日本へ遊びに来るのを約束してさよならしました。

時差ボケがとれないので、日本人の友達に会う前にパリ郊外のホテルで一泊しました。

僕と違って底抜けに呑みよるので、体調を整えておかないとひっくり返ってしまいます。早く寝るつもりがホテル近くのカフェで知り合ったアメリカ人カップルと遅くまで飲んでしまいました。

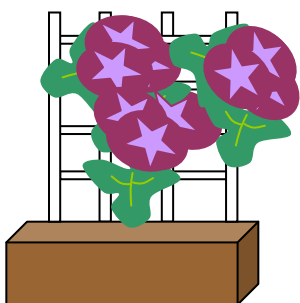
第二の目的はイギリスでスコッチを飲むために友達と二人一緒に入国することでした。一四区に住む友達と会って、すぐに電車のチケットを購入して、さあ「ロンドンへ」と言う段階になって、彼がパスポートを紛失して「どこにも気づきました。一年以上フランスから出ていないので、ご無くしたかも解らないらしいです。外国人はパスポートを常時携帯しておかないといけないんですが、彼はフランスの滞在許可証をもっているのです。パスポートを見せることが無かったです。」

日本大使館へ行って再発行を頼みましたが、二週間はかかるとの

事。今回もロンドン行きを断念せざるをえませんでした。

「ドゴール空港からミュンヘン空港へ。」

友達の住所と電話番号は解っているので、昼前に直接SバーンでPlanneg-Krailling駅に着いたら電話するから迎えに来て」と連絡をしていたのです。前もって地図検索をして「Stocdoof」駅のほうが近いのが解っていたので、下りて駅から電話をしようと思ったら帯圏外。Planneg 駅ならアンテナが立つのでした。田舎の駅で誰もいないので聞けない。とにかく駅から北東方向に歩いて一〇分。夫婦連れを発見して尋ねると親切に「フオン」で地図検索をしてくれて友達の住むエリアに到着しました。ゴロゴロとバッグを転がしていると後ろから「ちろー」と呼ぶ声が…



作
き
よ
ろ
り
ん

西公民館の自動販売機をご利用ください

宝塚市立西公民館 阪急今津線小林駅から徒歩2分の四階ジックルームの前に設置されているキリンの自動販売機は、管理のジャパソビバレッジ ㈱・ユニマックスの協力により収益の一部が障害者情報クラブの運営費として一九九四年四月より寄付されています。しかし、二階のわかりにくい場所に置かれているため、なかなか売り上げがあげられず、収益が伸び悩んでいます。 みなさん、西公民館をご利用の折には、是非、大塚製菓の自動販売機をご利用いただき、当クラブを応援してください。

バザー用品のご提供、ありがとうございました

障害者小規模作業所 ILセンターに、たくさんのお客様のバザー用品のご提供を頂きました。皆様の温かいご支援に、心から感謝し、ILセンター内で月々金曜日、販売致します。

今後ともご指導のご支援を賜りますようお願い致します。

宝塚第五地区防災手帳 完成!!

障害者小規模作業所 ILセンターで宝塚第五地区防災手帳を作成しました。ご希望の方には¥300で販売いたします。

お問い合わせは、障害者小規模作業所 ILセンターまで。

特定非営利活動法人とことこニュース

編集人 特定非営利活動法人とことこ

所在地 〒665-0882

兵庫県宝塚市山本南2-6-5

特定非営利活動法人とことこ障害者情報クラブILセンター

【障害者情報クラブへのご寄付、会費の振込みの方】

TEL&FAX 0797-82-2233

E-MAIL sjcil@hotmail.co.jp

郵便口座 14360-43110611 障害者情報クラブ

銀行口座 三井住友銀行 逆瀬川支店 普通 3566211

障害者情報クラブ

【アイエルセンターへのご寄付の方は】

池田銀行 山本支店 普通 28004

特定非営利活動法人 とことこ 理事長 中山君江